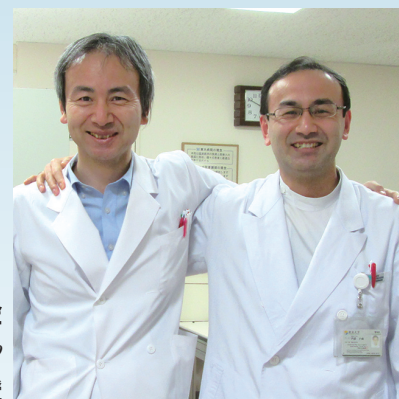


羅針盤



門野 夕峰

Yuhō Kadono

埼玉医科大学整形外科 教授

「気づき」から始まるご近所づき合い

皮膚科と整形外科とでは扱う組織が隣接していることから、感染、腫瘍、外傷などさまざまな場面で連携して診療することが求められる。とくに四肢においては、皮膚科と整形外科との連携で診療が完結することが多い。

蜂窩織炎が深部に波及して化膿性関節炎になることもあれば、逆に血行性に生じた化膿性関節炎の症状として皮膚に炎症が波及することもある。腫瘍に触れる場合、皮下腫瘍なのか、筋膜より深部の腫瘍なのかで担当診療科が判断されることもある。悪性腫瘍を切除するときには、悪性細胞で汚染される可能性を踏まえて進入経路を検討することが重要となる。全身性エリテマトーデス(SLE)、多発性筋炎・皮膚筋炎(PM・DM)などのリウマチ性疾患、乾癬性関節炎、体軸性脊椎関節炎などの炎症性疾患では、関節炎をはじめとする筋・骨格系症状だけでなく皮膚症状も呈する。これらにおいては、皮膚症状と筋・骨格系症状とをあわせて考えることで適切な診療に結びつけることができる。

何事も「気づき」から始まる。われわれの日々の暮らしは、何も考えなければ何も問題なく、時だけが流れていく。医療現場では、何も疑わなければ何も検査するこ

ともせず、病気はないものとして時だけが流れていく。皮膚科、整形外科がそれぞれの領域の診療だけをしていると、たいていの場合は問題なく時が流れていくが、時に病気の根幹にたどり着かない場面に遭遇する。皮膚科と整形外科の双方が、それぞれの領域だけでなく、周辺領域の知識を有していると何かおかしいと「気づき」、その後の診療を深めていくことにつながられるだろう。

専門領域の知識と技術を極めることは、医療者として生涯求められる要件かもしれない。加えて、関連する周辺領域の知識を勉強しておくことは、よりよい専門家であるために求められる要件かもしれない。お隣さんである皮膚科と整形外科がご近所づき合いを深めて連携していけるように、本特集においては、皮膚科と整形外科の双方が知っておくとよい情報を集め、著者の方々には非専門医でも理解できるよう簡潔にまとめていただいた。一話完結の読み物を少しずつ読み進めていただき、今後の臨床の現場における「気づき」のきっかけとなれば幸いである。

写真説明：兄・門野岳史と東京大学医学部附属病院にて撮影。